

「人に酔う」という言葉があるが、シュエダゴン・パゴダに行くと、仏塔と仏像の多さに酔い、信者の熱気に圧倒され、隅々まで見るにはよほどの気力と体力が要る。ヤンゴンに長く住んでいても、ゆっくりとあの空間を楽しみ、彫像としんみり対話をする機会はずくない。その理由の一端は、言うも恐れ多いことだが、仏像が俗っぽく稚拙に見えるからだ。仏像の良し悪しで拝む気持ちを変えてはならぬとは、たしか道元禅師の教えだったと思うが、そのような戒めが語りつがれたということ自体、仏像を美術的に品定めする日本人気質を語るものだろう。

ではシュエダゴンに見るべき美術品がないかという、そうでもない。祈祷堂の柱と柱をつなぐ「蝙蝠の翼」と呼ばれる木製透かし彫りには、高レリーフの彫像がちりばめられ、「木偶」と馬鹿にできない良品がけっこうあるのだ。

菩薩や如来の像は、どちらかと言えば型にはまって動きも少ないが、ブッダの前生話（ジャータカ）や仏伝に登場する庶民の姿は、多様でおもしろい。また人間だけでなく、家畜、野生動物、夜叉、羅刹、その他、魔物類も居てにぎやかだ。

その中で私の好きな動物彫刻を二つ紹介しよう。

シュエダゴン・パゴダの北西側、「シンダー王の鐘」が吊られている鐘堂の周囲は、柱の上部に木製透かし彫りのパネルがあり、金泥が施されている。ストーリーは仏伝で、南壁から始まり、東、北、西壁へと反時計回りに進行する。

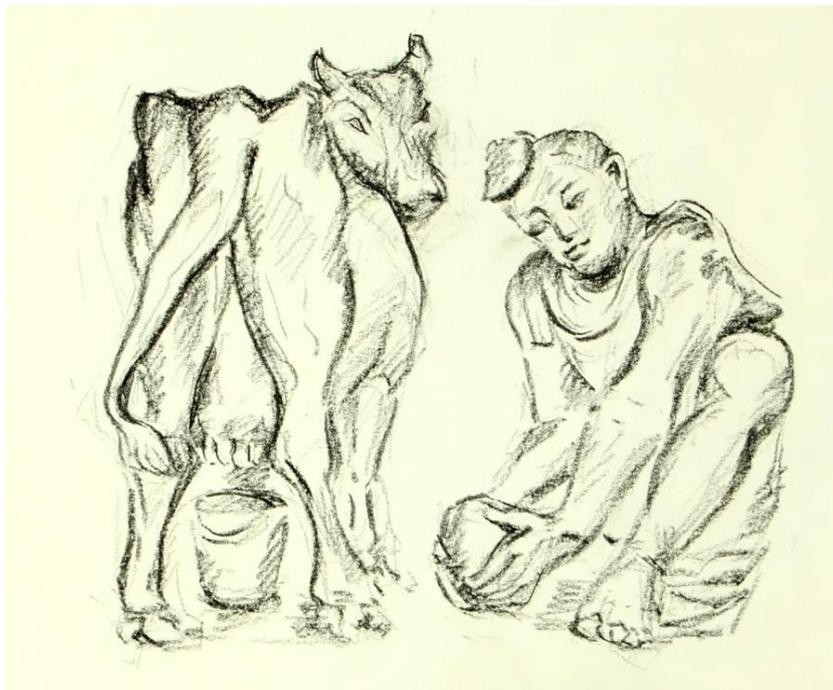
その第3部にあたる北壁は、2本の柱によって3面に分けられる。第1面は「出家」の章。愛馬カンタカにまたがり、従者チャンドカを従えたシッタルタ王子が、馬を降りて髪を切り、従者と馬を城へ戻す。だが王子と別れた馬は悲しみのあまり脚が進まず、道端に身を横たえ、力尽きてしま



まう。必死に起きようとする、首筋の筋肉。力の抜けた足掻き。ビルマ装束の従者チャン

ダカも涙が止まらない。先程あるじと生き別れたばかりで、こんどは愛馬と死に別れるのだ。人と動物の別れは、いつの世でも美しく語られる。

つぎの場面は「成道」(悟り)だが、菩薩シッダルタは菩提樹の下で瞑想する前に、村の娘スジャータから牛乳の入った米の粥を食される。その材料となる牛乳を搾る男と、牝牛のペアの像がある。片膝を立て、牛乳の入った壺を大事そうに抱えている男は、これから立ち上がるつもりなのだろうか。それを肩越し



になかば心配そうに、なかば誇らしげに見ている牝牛の、尻を向けた像がユニークだ。角ばった腸骨と、その下に丸く垂れさがる乳房のコントラスト。内股から乳房にかけての細かな皺が、皮膚の柔らかさを示している。見たところ漫画風だが、牛の骨格や筋肉に関する作者の知識は、並大抵ではない。

『今昔物語』巻第一の第三十四「長者の牛、乳を仏に供養する語」というのがある。今は昔、天竺^{てんじく}に一人の長者がいた。「食欲邪見」のケチ長者で、所有する牛は五百頭。その中に一頭、信心深い牝牛がいて、何とか釈尊に乳を供え、次の世はましなものに生まれ変わりたい、と願っていた。だが「朝に追い出し 暮に追い入る」ケチ長者のもとでは、その機会がない。ある日ようやく群から離れると、仏の前に進み出た。「世尊^{せそん}に乳をお供えしたいと思います。でも少しだけわが子のために残しておくことをお許してください」。ところが仔牛もよくできた子で、「我は草を食せむ。乳をば速^{すみ}やかに仏に供養し奉れ」と言うと、生い茂る萱の中に隠れ伏してしまった。釈尊は「この功德^{くどく}を以て天に生まれ変わるべし」と仰せられたが、それが母牛だけなのか、仔牛にも与えらえたご褒美なのか、『今昔物語』では明らかでない。

シュエダゴン・パゴダのレリーフに『今昔物語』の仔牛は出てこないが、誇らかで尊厳に満ちた牝牛の後姿は神々しい。仏師は輪廻^{りんね}転生^{てんじょう}や因果^{いんが}応報^{おうほう}を疑わず、清らかな思いで彫ったのだろう。心を静めて拝観すべき名品である。